
ジャネンバ戦記

俺がベジータだー！！

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャネンバ戦記

【Zコード】

Z3576W

【作者名】

俺がベジータだー！！

【あらすじ】

事故で死んだ男子高校生が何故かジャネンバの姿になってしまつた。しかもここはネギまの世界！？この小説は一発ネタ 何故かジャネンバになつてしまつたが好評だったので書いた小説です。若干内容が変わっている所もありますのでご了承ください。

第一話（前書き）

また書いてしまった。

第1話

俺の名前は鈴木一樹、ドラゴンボールが好きな普通の高校生だ。

突然だが、俺は死んだ。

何故死んだのかと言うと、自転車で帰宅途中していた所をトラックが後ろから突っ込んできたのだ。

一瞬の出来事だった。少しの間意識があつたが俺はすぐに意識を失つた。

どれだけの時間が経つたのだろうか？

意識が戻り目を開けると、そこには湖と森があるだけだった。

「ここが天国って所か、閻魔大王のおつかいやんはいないんだな。」

そう口にすると、異変に気づいた。

何故か声が変わっている。

変だなと思い自分の身体を見た。その瞬間、固まつた。

「は、はは、そ、そんなバカな事が…」

やつ言いながら近くにある湖に近づき自分の顔を見て、また固まる。

そこには、赤い顔で頭に2本の角があった。

「な、なんじゅこつや——————」

そう、俺は劇場版ドラゴンボール最強の敵、ジャネンバになつてい
たのだ。

しばらくして落ち着いた俺は、自分の状況を確認していた。

俺はトラックに跳ねられ死んで、何故かジャネンバになつっていた。
そしてこじが何処だかは不明。

…情報が少なすぎる。

そもそもこじは一体何処なんだ？地獄ではなさそうだしそもそもこ
んな所ドリゴンボールはない。

まあ、悩んでも仕方がないか。とりあえず人を探そう…

……つて俺ジャネンバの姿だからダメじゃん……こんな姿見られた
ら絶対追われるだろ！！

はあ、なんでジャネンバなんだよ、どうせならベジータが良かつた
よ。

まあ、なつちまつたもんはしじがねえか。取り合えずこの身体の
スペックを見よう。

そう思い、近くにある木を軽く殴る。

すると、木がベキベキと倒れ、近くの木に当たるとまたその木がベキベキと倒れた。

…… ちすが劇場版最強の敵、軽く殴つただけでこれか。

てかジヤネンバの力があれば世界征服もできるな、しないけど。

次は身体を分解をしよう。と言つても分解の仕方など分からぬから、分解しようと等と思つていたら本当に分解できて少しづびつた。

しかし周りが見えるのに自分がいなのは少し変な感じだな。

とりあえず元に戻ろうとしたが、人の声が聞こえたので止めた。

声がした方を見ると、二人の男が大きな袋を持つて走っていた。

「へへへ、まさか本当に皇女を攫えるとはな。」

「護衛も付けずに歩くとはバカな奴だ。」

「もがががーもがーーー！」

「うわー? くそ、暴れるなーーー！」

どうやら人攫いの様だ、あの大きな袋に誰か入っているようだ。

しかもあいつら皇女って言つていたからかなり位の大きい人物の様

だ。

ふむ… 皇女さんを救つて恩を売るのも悪くないな。

思い立つたが吉田と俺は姿を現した。

「うわ！？ な、なんだてめえ！？」

「ばー化け物だ！！」

物凄く慌てる男二人組み。まあいきなりジャネンバが現れたらね。

「こ」の化け物めー「これでもくらえー！」

一人が懐から杖をだし、何やら呟く。

「これでもくらえー！ 魔法の射手！！」

男がそう言つと、火で出来た矢が飛んできた。

それを見た瞬間、俺はここが何処かわかつた。

ここはネギまの世界だ、何年か前に読んだが結構面白かった。大分忘れているけど。

余談は置いといて、取り合えず分解して矢を避ける。

「なーき、消えたー！」

「身体がブロックの様になつたぞ…」

そう言つてゐる男一人の後ろに俺は現れ、二人を軽く殴る。

「…アタシが…」

「ふべくー！」

そんな声を出しながら吹つ飛んでいつた。流石ジャネンバ凄い力だ。

そう思いながら袋を見る。もう「もう」と蠢いている。

んへ。」Jはネギ家の世界だねへ。ト事は黒女と並んでいた。

悪い予感を抑えながら俺は袋を開いた。すると……

テオドラさんが目を大きく開いて叫んでいました。

なぜお前がこいついる。

呻きながら逃げようとするが手足を縛られて動けない。目に涙が溜まっている。

…… こんな姿だからこうなると分かつていたが結構ショックだな。

少し気持ちがブルーになるが、とりあえず口に縛つてある布を取る。

「ひええええ！？妾は美味しいのじゃーーー！食べないでたもーーー！」

「食べるかーーー！」

思わずピッコロさんの名前が出てしまつた。

ほ、本当に婆を食べないのか？」

「ああ、第一不味そうだし。とりあえず縄を取るぞ。」

そう言つて縛つてある繩を切る。

「ふう、ようやく自由になつたのじや。所で、妾を攫つた奴は何処にいたのじや？」

どうやら俺は敵ではないと判断したらしく、俺に話しかけてきた。

あの男一人組みなら俺が遠くに飛はしてやつたよ

おお！ それはよくせう！ たのじや！ 壊めてつかわす。

皇女なたけに態度かでかし

「お前の名前は？」

知っているか一応聞く

「妾はヘルラス帝国第三皇女テオドーリヒ母す。セウトの名前を
なんじや？」

「俺の名前か…」

「俺は……ジャネンバだ。」

「ジャネンバ？変わった名前じゃの。それにしてもジャネンバは一体何者なんじゃ？ジャネンバの様な者は初めて見るわ。」

ネギまの世界では悪魔等がいるがジャネンバの様な生き物など存在しないからな。

「まあ、俺はこの世界のには存在しない箇の生き物だしな。」

「どうして？」

「トントと首を傾げるテオドーラに俺は説明をした。

「俺は！」とは違う世界からきたんだ。」

「ふむ、ではジャネンバは旧世界から来たのか？」

「違う、俺はこの世界とは違う世界、異世界から来たんだ。」

「異世界じゃと…な、なるほど、それなら説明がつべのじや。」

「……疑はないのか？」

「妾はジャネンバの言つ事を信じるのじや。」

「随分と信頼してくれてんだな。」

「妻を助けてくれたからの。顔はちゅうと怖いが…」

「人が気にしてこる事を。」

「ジャネンバは人では無いじゃろ。」

「そういえば俺はもう人外になつちまつたんだ。」

「わろそろ帰らねばならんのう。お父様も心配しておゐじやない。」

「

「テオドリは「」が何処か知つてこるのか?」

「知つてゐわけなかわつ。妻は連れ回されたんじゃね。」

「じゅあぶつやつて帰るんだよ。」

「つへむ、ジャネンバ、何とかしてほしのじや。」

「何とかしらと書われても…」

「そう言いながら俺は気を探る。すると少し遠い所から沢山の気が感じられた。」

「多分向ひつだと思つた。」

「いつまつて指を指す。」

「本当かーでもなんでそんな事がわかるのじや?」

「テオドリは氣を知つてゐるか？」

「つむ、知つておぬれ。」

「俺は氣を探つて人を見つけることが出来るんだ。そして向ひの方角に沢山の氣があつた。おそらくそこだらつ。」

「ほお、随分と便利じやな。」

「まあな。少し遠いから飛んでいくぞ、背中に乗れ。」

そう言つて背中に乗るテオドリ。

「つむ、わかつたのじや。」

そう言つて背中に乗るテオドリ。

「それじや、行くぞ。」

そう言つて俺は飛び始めた。

悪人面の化け物が背中に少女を乗せて飛ぶ光景。

…悟空とベジータが見たらすつ飛びよつた光景だったことに記入しておぐ。

第1話（後書き）

はい、と訳で今度の主人公はジャネンバに憑依した高校生です。
また途中で止めるかもしれませんがあとよろしくお願いします

あれからしばらく飛ぶと、かなり大きい街が見えてきた。

「へえ、結構大きいじゃないか。」

「当然じゃ！」これはヘラス帝国の首都、ヘラスじゃからの！」

そう言つて胸を張るテオドラ。

「それで、何処に降ろせばいいんだ？」

「あれ」にある西殿の中庭に降ろしてほしいのじゃ。」

すると宮殿の中から兵士がワラワラと出てきた。まあ攫われた皇女が悪人面の化け物と一緒に飛んできたら誰だって警戒するだろ？

「貴様！何者だ！姫様から離れろ！！」

隊長らしき人物が杖を突きつけながらそう言つてきた。

「皆の者一武器を收めるのじや一」の者は誘拐された妾を助けてくれたのじやーー。」

「な!? それはまことですか?」

「。せごひかへとい」

「…皿の者、武器を下ろせ。」

隊長らしき人がそう言つと、兵士は武器を下ろした。

「すみません、姫様を助けて頂いたとは知らずに…」

「いや、構わんよ。俺の様な化け物と一緒にいては警戒されるのも無理は無い。」

俺はそう言つて自嘲気味に笑う。すると少しの間沈黙が続いた。耐え切れなかつたのか隊長が少し大きな声で言つた。

「…そ、それよりも、皇帝様が姫様の帰りをお待ちしています。会いに行つては如何でしょつか？」

「そ、そうじやなーお父様も心配しているじやねん、それにジャネンバも紹介せねば。」

そう言つて歩き出すテオドラ。

「ジャネンバー妾について来るのじや。」

「わかつた。」

俺はテオドラの言つとおつこつこて行つた。

テオドラについて行つた俺は今、皇室でヘラス帝国の皇帝と向き合つてゐる。何故こうなつたのかと言つと、お礼がしたいだそうだ。

周りにいる人は俺の姿に困惑つてゐる様だが、皇帝は俺の姿を見ても眉一つ動かさないでいた、流石皇帝なだけある。

そう思つてゐると、皇帝が口を開いた。

「娘を助けて貰つて本当に感謝している、ありがとうございます。」

「いえ、当然の事をしただけです。」

「ふむ、しかし娘がモンスターに助けられるなんて思つてもいなかつたぞ。」

「俺をそちら辺のモンスターと一緒にしないで頂きたい。」

「おお、すまんな。それと褒美の件だが……ここに住まないか?」

「え?」

「テオドラに聞くとお前は住む所も無いのだろう? なじこいで住めばいい、衣食住は保障する。」

「…俺は別に構いませんがいいのですか? 俺の様な化け物を宮殿に住ませて?」

「テオドーラの恩人に化け物もないは。遠慮はしなくていい。」

「わかりました。」

「それと頼みたい事があるのだが…」

「何でしようか?」

「テオドーラに付き合つておいてくれんか? テオドーラは町殿の中が暇だと言つてすぐ外に出てしまつた。そのせいで誘拐されたんだがな。」

「つまり危険だから俺に護衛をさせようとした?」

「うむ、そんなところかな。」

「それならまあいいですよ。ただし、給料は払つてもらいますがね。」

「

「これはなかなか手こわいな、まあいいだろ。話はこれだけだ、下がつていいぞ。」

「それでは、失礼します。」

やつて俺は王座から去つていった。

「ふう。」

ジャネンバが王室から出て行ったのを見た俺は、小さく溜息を吐いた。

「陛下、よろしかったのですか？あのよつた者を面殿に泊めて。」

配下の一人がそう話しかけてきた。

「ああ、テオドラの恩人だしな。それに化け物と言つて差別するなど俺の誇りが許さん。」

「陛下がそう言つのであれば。」

そう言つて配下の一人は下がつていった。

それにしてもジャネンバは俺の見た目ではかなり強いと見た。

最近連合との間できな臭い事が起つていて、戦力確保には全力を注がねば。

ジャネンバは俺の配下ではないがおそらくテオドラが「妾の騎士になるのじゃ～」と言つて迫るだろう。そしてジャネンバはそれを受諾するだろう。これでジャネンバは俺の配下になるわけだ。

少し汚いが今は手段を取つている暇は無い。はあ、全くめんべくさい事になつたもんだ。

そう思い、俺はまた小さく溜息を吐いた。

第2話（後書き）

ジャネンバつて何氣にイケメンだよね。

王室から出た俺は、これから住む部屋に案内された。

部屋は広く、中々豪華だった。

「そ、それでは何か御用がありましたら、このベルを鳴らしてください。」

そう言つて部屋を案内してくれたメイドさんが部屋から出て行った。

メイドさんの顔がちょっとこわばつていたな…まあこんな姿だからな。

しかし俺は何でジャネンバ何かになつたんだ?確かにジャネンバは好きなキャラだったが…

まあなつちまつたもんはしうがねえか。どうせ俺は事故で死んだんだし、ジャネンバとして生きていくのも悪くは無い。

そんな事を思いながら俺は寝た。てかジャネンバも寝れるんだな。

翌日、目を覚ました俺は腹が減つたのでベルを鳴らした。ジャネンバも腹が減るんだね。

少し待つと、メイドさん達が朝食を持ってきた。昨日まで一般人だった俺には凄い豪華な朝食だ。

昨日から何も食べていない俺はたまらず朝食に齧り付く、かなり美味かった。

朝食を食べ終わり、何しようかなと思つてゐる。

バン！ つと勢いよく扉を開いてテオドラがやつてきた。

「朝はるからテンション高しな、それで、何のよいた?」

一
瞬だから遊びにきたのじゃ！

はいはい、それで、何するんだ?」

「そりじゃのう、シヤネンバの事が知りたいのじや。」

「俺の事を？」

「 そ う じ ゃ 。 ジ ャ ネ ン バ は 一 体 何 が で き る ん じ ゃ ? 」

「 そ う だ な あ … 俺 は 空 間 移 動 が 出 来 る ぞ。 」

「空間移動? なんじやそれは?」

「聞くより見る方が早い、今見せてやるよ。」

「やつぱり俺は身体を分解する。

「な、何じゃ……ジャネンバの身体がブロックみたいになつて消えたのじゃ……」

目を見開いてやつぱりオーディオ。

「まあ、こんな感じだな。」

やつぱりながらオーディオの後ろに姿を現す。

「おおー、凄いのー。」

「ああ、空間移動はかなり便利な能力だからな。」

「そんな凄い能力を持つていろいろじゅつたら、ジャネンバもかなり強そうじゃな。」

「実際強いぞ。」

「やつぱりこの世界で俺に勝てる奴などいないだろ。」

「つむ、ジャネンバがどのくらい強いのか見てみたいのじゃ。」

「別に俺は構わんが、一応皇帝にお前の護衛を頼まれてるから俺の強さを把握しておいた方がいいからな。」

「やつぱりじゃな、ではやつぱり戦つてもいいのじゃ。」

あの後、俺は訓練所に呼ばれた。どうやらここで戦つらしい。

俺の前には兵士が100人ほどいる。服装からして近衛兵だらう。何故100人かと言うと、皇帝がこれくらい倒さなければテオドラの護衛は勤まらないとか。

因みに剣を持った兵士が50人で杖を持つた兵士が50人だ。

何処で聞きつけたのか、野次馬もたくさんいる。

「これより、模擬戦を始める!!」

審判らしき人がそう言つ。

「相手は一人だけかよ、こりやすぐに終わりそうだな。」

「いや、あの姿を見ろよ。あいつ相当強いぞ。」

「確かに強そうだがこつちは100人いるんだぞ？数で押せばいるさ。」

「どうやら兵士達はかなり楽観しているらしい。

「お前ら、私語は慎め。」

審判がそう言つと、静かになつた。

「それでは、試合開始！！」

審判がそう言つと同時に、兵士が動いた。

剣を持った兵士が四方に散らばり、杖を持った兵士は魔法の矢を放つってきた。

恐らく魔法で制圧しながら配置に着くのだろう。なるほど、さすが近衛兵だ。だが相手が悪かつた。

俺は手の甲を前にして腕を広げる。すると丸い鏡みたいな物が俺の前に現れる。映画で使っていたやつよりもかなりでかい。

そして鏡のような物に魔法の矢が当たると、魔法の矢はその中に吸い込まれた。

『なに！？』

まさか魔法の矢が一つ残らず吸い込まれるとは思つてもいなかつたのだろう。兵士が驚愕の声を上げる。

そしてその隙だらけの杖を持った兵士の上空に丸い鏡が現れ、魔法の矢が降り注ぐ。

「ぐわああああ！－！」

「ぎゃあああああ！－！」

「な、何で魔法の射手が…っ！」

これにより杖を持った兵士は壊滅状態になつた。

「ぐ、ぐそー皆の者怯むな！突撃！」

隊長がさう言い、剣を持った兵士が向かつて來た。

「うおおおおお…！」

そつ叫んで一人が切り込んできた。

俺はそれを身体を少しずらして避け、腹に一発お見舞いする。

「がはあ…！…！」

後ろにいた3人を巻き込みながら飛んでいった。

「もうつた…！」

隙を見た一人が背中に切り込んできたが、尻尾でなぎ払う。

それでもワラワラと俺に向かつてくる。めんどくせこので氣を放出してなぎ払おう。

「はああ…！…！」

ドヒュウ…！と見えない氣が放出され、耐え切れず全員が飛ばされ、動かなくなつた。

「ふん、もう終わりか。」

そう言つて審判を見る、審判はポカーンとしていたが気づいて勝敗を言つ。

「しょ、勝者—ジャネンバ—！」

審判が上ずつた声でわざと、歓声が上がつた。

「すげえ！本当に勝ちやがつた！—！」

「近衛兵100人を僅か1分で…あいつ何何者だ？」

歓声を聞きながら俺はテオドラの所にいつた。

「どうだ？俺の強さは？」

「何といつか…もの凄かつたとしか言えんのじや。」

「あの近衛兵はそれほど強かつたのか？」

「つむ、わざじや。帝國ではかなり強い部類に入るのじや。」

「ふむ、やはり俺が強すぎるのか。まいったな、まだ本気の1%も出していくないのに。」

「な、なんじやと…」

そう言つて呆然とするテオドラ。肩がブルブルと震えている。

「決めたのじゃー・ジャネンバ！妻の騎士にならのじゃーー。」

「はあーー？」

「あの圧倒的な強さを持つお主の主は、いかがふさわしい……。」

そう熱弁するテオドロ。

「……まあ、別にいいけどや。」

「いむー、それではパクティオーをするのじゃ。部屋に戻るのじゃ。」

「パクティオー？ 何だそれは？」

うーむ、忘れてしまったな。

「従者契約のことじゃ。」

「何で部屋に戻る必要があるんだ？」

「ひ、や、それは……は、早く部屋にこへのじゃーー。」

「ちよーー引つ張るなよー。」

「ひして俺はテオドロに引つ張れて部屋に戻った。

パクティオーの契約の仕方も知らずに……。

第3話（後書き）

魔法世界の兵士の種類が分からぬから適当に書いた。誰か教えてくれ

あの後、テオドーラに引っ張られた俺は今、テオドーラの部屋にいる。

だが、テオドーラは顔を少し赤くしたりして落ち着きが無い。

「どうしたんだ? そんなにそわそわして。」

「な、なんでもないのじゃー。や、それよりも妾と同じ皿線にならぬ
うつ屈んでほしこのじゅ。」

「何で屈む必要が?」

「~~~~ツー！ いから早く屈むのじゃー。」

何か知らんが怒鳴られたので、言ひとおりに俺は屈む。

「屈んだぞ。」

「う、うむ。それでば…」

そう言ってテオドーラは俺に顔を近づけ、キスをした。と、同時に契
約の仕方も思い出した。

ぬおおおーーもひ出しても遅こよーーて言ひかこれ犯罪になる
んじやーー！

俺の頭が混乱している内に、契約は無事に成功したようだ。

「ああ…俺の初めてが…」んなガキに…」

「む、失礼な、妾のよつな美女にキスされたんじや。わつと喜ぶのじや。」

「俺はロココンじやねえ。」

何が悲しくて、10歳位の少女とキスせにやならんのだ。

「そんなことよつ、カードが出来たのじや。」

やつてカードを見せてくるトオドロ。

「「」のカード」はどんな効果があるんだ?」

「やつじやのひ。必ずアーテアッシュと唱えると専用の魔法具であるアーティファクトを呼び出すことが出来るのじや。」

「ふ~ん、じやあさつそく。アーテアッシュ。」

そつと、俺の手に一本の剣が現れた。その剣は剣身が濃い桜色で、鍔が薄い紫色だった。」、「こつはツ…」

「つ~む、中々かつ」に剣じやな。どれどれ名前は…「ティメンシヨンソーダ」、名前もかつ」のひ。」

テオドラがそつと、が俺は歡喜に打ち震えていた。ジャネンバにはやはりこの剣がなくては。

「つむ?ジャネンバよ、嬉しそつじやな。」

「ああ、ここには俺の相棒だからな。」

「ジャネンバがそう呑のなら余程の物なんじゃな。」

「まあな、一振りすれば数百メートルも斬れるからな。」

「なんじやその剣は、反則じゃな。」

「やうこえればどうやつたらこの剣を仕舞えるんだ?」

「アベアツトと畳えれば仕舞えるのじや。」

「わかった。アベアツト。」

そう畳えると、ディメンションソードは消えた。

「他には何か無いのか?」

「やうじやのう、カードをおでこに当たると念話で離れていても話す事ができるのじや。それと、*atk*が限界じやが妾がジャネンバを召喚するのも可能じや。」

「ほひ、カードは中々便利だな。」

「つむ、あと妾の魔力を流す事でジャネンバの身体能力を上げる事も出来るんじやが…」

「お前の魔力を流しても俺にはあまり効果がないだろ。」

「うむ、悔しいがその通りじゃ。」

精々戦闘力が300位上がるだけだしな。俺には必要ない。

「まあ、こんなもんじやのつ。」

「いやしかし、ティメンションソードが自由に取り出せるのは嬉しい誤算だ。この事に関しては礼を言つぞ。」

「むふふふ、そう褒めるでない。」

テオドラがそう言ひ終わると、テオドラの腹からク～と情けない音が鳴つた。

「ふむ、そろそろ昼飯の時間か。」

「うむ、そうじやのう。妾のお腹が悲鳴を上げているのじや。」

「ホントやれぱり、俺の身体を器用に上へて乗つた。

「さあジャネンバよ！食堂にレッテ行ーじゃーー！」

「はいはいわかりましたよ、お嬢様。」

そう言つて俺は食堂に向かつた。

第4話（後書き）

剣の名前はレイジングブラスト2の究極技から取りました。あとあまり出番ないかも。正直微妙なんだよねこの剣。

俺がネギまの世界に来てから早くも6ヶ月が過ぎ、そして戦争が始まった。

以前よりきな臭かった帝国と連合がついに衝突し、大分烈戦争と呼ばれる大戦争にまで発展してしまった。

そして今、俺は会議室にいる。皇帝は俺を最前線に投入させて一気に方を付けようとしてる様だが。

「ダメなのじや……ジャネンバを戦地なんかには行かせないのじや……！」

この通り、俺の主であるテオドラが頑固拒否の姿勢を取っているのである。

「だがなあ、テオドラ……」

「ダメなものはダメなのじや……」

「まあまあ陛下、よろしくではありますか。」

「左様、我が帝国は連合に対して連戦連勝、オステイアもすぐ落とせるでしょ、この者の力を借りなくとも、帝国は勝てるでしょう。」

「いやしかし、もしもの為にはやはつ……」

「むひ～……お父様はしつこいのじゃ……そんなお父様など大嫌いじゃ……」

「大嫌い……ガーンン！」

そう言つて皇帝は〇～の格好をする。それでいいのか皇帝。

「お父様など知らないのじゃ……ジャネンバ一行くのじゃ……」

「はいはい。それでは失礼します。」

そつと俺とテオドラは会議室から出て行った。

会議室を出たのは良いが、テオドラがかなり機嫌が悪いので街に連れて行くことにした。

俺は肩にテオドラを乗せ、街を歩く。

「ジャネンバよ！ 次は向こうにいじゃ……」

「はいはい、わかったよ。」

テオドラの言つがままに俺は動く。

「おお、テオドラの嬢ちゃんとジャネンバじゃねえか。一人でテー

トか？熱いねえ。」

「お、たこ焼き屋の親父さんじゃないか。あと何で「んなガキ」とハートせにやならんのだ。」

「ははは…すまんな。たこ焼き一つ買つていいくか？」

「ああ、貰つておいつ。」

俺も大分この街に溶け込んできた。初めはこの姿のせいで怖がられたが今は皆も慣れたのか気をくに話しかけてくれる。あと何故たこ焼きがあるのかは知らん。

ん？いつも騒がしいテオドラがやけに静かだな。

「妾とジャネンバがデート…しかし妾達は種族が違うし…いや別にジャネンバの事は嫌いではないが…むしろ『ゴーレム』…」

何やら自分の姿に入つている様だ。

「おい、テオドラ。」

「ほえ！？な、なんじゅ…」

「お前もたこ焼き食べるか？」

「え？あ、食べるのじゅ。」

「親父、もう一つくれ。」

あいよ、こと返事をする親父。少し待つと出来立てのたこ焼きが出
てきた。

「うむ、やはり出来立ては美味しいな。」

「おおむね、もうじやな。

そうやってたこ焼きを食べている俺達に、後ろから声をかけられた。

「おー！そこの前ーー！」

—
—
h
?
—
—

振り返るとそこには、筋肉達磨もといジャックラカンが仁王立ちしていた。

「なんじゃこの筋肉達磨は?」

「！筋肉達磨じやねえ！俺様は世界最強の傭兵、ジヤツクラカン様だ

「自分で世界最強とか言ってやがる。 すげえ痛い奴だな。」

「うむ、痛いのう。」

「で？ その世界最強の傭兵（笑）が何のようだ。」

俺様と勝負しろ！！

「は？」

「人目見ただけで分かつた。お前は相当の実力者だと。」

「そりや 光栄だね。」

「俺様は強い奴を見るといてもたつてもいられねえんだ。まあ最終的に勝つのは俺様だがな。」

そつ言つてラカンはH A H A H Aと笑う。

「ふうん。だがことわ「面白いー受けて立つのじやーー」「うおい！何勝手に言つてんだテオドラーー！」

「いいではないか。この男に誰が世界最強なのか見せてやるのじや。」

「

「ほーお、この俺様に勝利宣言とはいいで胸だ。」

「はあ、もういいよ。それで？何処で戦うんだ。」

「前に模擬戦をした所でやるのじや。」

「いや、街の外でやつた方がよさそうだ。ついて来い。」

「へ、久々に大暴れが出来そうだぜ。」

俺様はジャックラカン。世界最強の男だ。

仕事を求めてヘラスに来たが、仕事の相手はどいつもこいつも弱すぎる。ま、俺様は最強だからな。

誰か俺様と殴り合える奴はいないのかと思っていた所に、奴が目に入った。

奴は今まで見たことのないやつだった。そして俺様の本能が告げる、こいつは本物だと。

俺様の身体がプルプルと打ち震えた。こいつと戦いたいと。

「おい！そこのお前！！」

気づけば俺様は奴に話しかけていた。

「なんじゃこの筋肉達磨は？」

奴の肩に乗っていたガキが話した。誰が筋肉達磨だ！！

「筋肉達磨じゃねえ！俺様は世界最強の傭兵、ジャックラカン様だ！！！」

「自分で世界最強とか言ってやがる。すげえ痛い奴だな。」

「つむ、痛いのう。」

「で？ その世界最強の傭兵（笑）が何のようだ。」

もの凄く馬鹿にされているが構わず俺様は言つ。

「俺様と勝負しろーー！」

「は？」

「人目見ただけで分かつた。お前は相当の実力者だと。」

「そりゃ光榮だね。」

俺様は強い奴を見るといてもたつてもいられねえんだ。まあ最終的に勝つのは俺様だがな。」

俺様は腕を組み、ハハハと笑う。確かに奴は強いが俺様は負けない。何故なら俺様だから。

「ふうん。だがことわ「面白いーー受け立つのじやーー。」つむーー。何勝手に言つてんだテオドラーー！」

「いいではないか。この男に誰が世界最強なのか見せてやるのじや。」

「

「ほーお、この俺様に勝利宣言とはいいで胸だ。」

本当にいい度胸していやがる。だがこのガキの言葉からして奴は相当強いらしいな。早く戦いたいぜ。

「はあ、もういいよ。それで?何処で戦うんだ。」

「前に模擬戦をした所でやるのじや。」

「いや、街の外でやつた方がよさそうだ。ついて来い。」

奴はそう言って街の外に向かっていった。恐らく被害を軽くする為だろう。これなら心置きなく戦うことができるな。

「へ、久々に大暴れが出来そうだぜ。」

第5話（後書き）

なんか無理矢理感が…

第6話

あの後街から出た俺達は、草原で対峙していた。

テオドラは危ないから遠くに離れている。

「そう言えばまだお前の名前を聞いていなかつたな。

「もう言えばそうだな。俺はジャネンバだ。」

「そうか。ジャネンバ！ そろそろ始めようじゃねえか。」

「ああそうだな。」

そう言って俺とラカンはスッと構える。

そのまま一人は動かない。

お互ひ、隙を全く見せていないのだ。

ふむ、流石ネギまのバグキャラの一人だ、そろそろ仕掛けるか。

「ずあああーーー！」

俺はそう叫んでラカンに突っ込んだ。

「ぬー結構速いな。」

ラカンがそう呟くが構わず右ストレートをお見舞いする。

だがラカンはそれをかわして俺に殴り掛かる。

俺はラカンから繰り出される拳を拳で防御する。

「はーまさか俺様のラッショウに着いて来れるとはなーー！」

「ふん、ならもうと速度を上げようじゃないか！」

俺のラツシユに着いてこれず俺の拳が当たる。

અનુભૂતિ

バキ！と足でラカンを蹴り上げ、ラカンは空に打ち上げられる。

俺はビションと高速移動をして空に上がっているラカンの少し上に現れ、手をハンマーの様に組む。

「ドーコン！…」とラカンの背中に叩きつけ、ラカンはキーンーと音を立てて下に落す、ドーコン！…と地面にクレーターを作った。

「え？ した？ もう終わりか。」

俺は地面に降りながらそう言つ。だが返事は無い。

「あれ？ もしかして本当に終わりなのか？」

そう言つて首をひねてみると、殺氣をぶつけられた。

「ククク……ハーツハハハ……」

ラカンは笑いながら穴から出てきた。

「今のは効いたぜジャネンバ。だが俺様も伊達に無敵と呼ばれているからな。これくらいじや倒れねえよ。」

「全くしづぶとい奴だ。」

「こんな楽しい試合を簡単に終わらせてたまるか。ジャネンバなら本気でやつてもよさそうだ。何せ俺様が本気になつたら大抵の奴は瞬殺しちまつからな。」

そう言つてラカンは氣を高める。ほつ、この世界では驚異的な戦闘力だな。まあドーラゴンボールが異常なんだろうけど。

「それじゃあ行くぜえ……」

ラカンがそう言つと、さつきとは比べ物にならないほど速度で突っ込んで来た。

「おらああ……」

ラカンの右ストレートを俺は右腕でガードをし、左手で殴りつけるが、ラカンはそれをかわしてさらに俺に左手で殴りつける。

「チツー！」

俺は後ろに飛び退くがラカンは逃がさないとばかりに俺に接近する。

「おらあー！」

と突っ込んで来たラカンに尻尾をぶつけるが逆に尻尾を掴んで引き寄せてきた。

「ずあああー！」

とラカンが右ストレートを放ってきた。俺はそれをまともに验らいで、吹っ飛ばされた。

ズザザザザー！…と地面を削りながら数十メートル飛ばされ、止まつた。

「はあはあ、へ、どうだ。今のは効いただろ。」

ラカンがそう言つが、俺はムクつと立ち上がる。

「なー？俺様の全力のパンチが効いてねえ…」

「どうやら俺はお前を見くびっていたようだ。すまんな、本気には本気でやるのが流儀だが生憎俺が本気を出したらこいら一帯が吹っ飛んでしまうんでね。1万分の1の力を出してやる。それでもどんでもない力だから気をつけろよ。」

そう言つて俺は氣を高める。俺の身体から紫の氣の炎が俺を包み込

み、突風が吹き荒れる。

「「つおおおーーー?」

ラカンが足を踏ん張つて耐える。

「はああああーーー?」

グラグラと地面が揺れ始め、亀裂が入る。

「ああああああーーーーー!」

そして、地面が盛り上がった。

バチバチと俺の身体から電気がスパークしている。俺もここまで力を出したのは初めてだ。やはりジヤネンバは凄い、1万分の1の力でもラカンを軽く上回っている。

「あ、あああ…」

ラカンは今まで感じた事の無い力を前に、足がガクガクと揺れいる。

「どうした?足が揺れているぞ。それに俺はまだ一万分の1の力しか出していないぞ。」

「…へ、武者震いだ。」

強がつてそう言っているが冷汗をダラダラとかいて顔も真っ青だから説得力皆無である。

「それじゃあ、行くぞ！－！」

「ヒュウ－－！」と地面を踏み込んでラカンに接近し、腹に殴りつけた。

「ツ－－！」

声も出る暇も無いほど速く、ラカンは数百メートル地面に引きずりられる。

俺は高速移動でラカンの前に出て、さりに足蹴りをする。

「ぐはあああ－！－？」

数十メートル打ち上げられ、重力に従い地面に叩きつけられる。

「あ、あつづ…」

ラカンの身体にはいたる所から血が出てこる。

「どうやら今までのようだな。」

「ちくしょう…俺様の完敗だ…だが次は負けんぞ。」

「ふん、1万分の1の力に手も足も出ないお前なぞ一生かかっても無理だ。」

「確かにそうかもな…だが、俺様は諦めんぞ。」

「まあ再戦はいつでも受け入れる。」

俺はそういつってラカンに手を差し出す。

「すまねえ。」

「いやなこ、街まで送つてこつてやうひか?」

「頼む、今の俺様じや立ち上がるのが精一杯だ。」

「うつして俺達は街に向けて歩き出した。」

はて?何か忘れているような…まいっか。

「ぬおおおお……足が挟まつて動けないのじやー……ジャネンバ早く助けるのじやー……!」

テオドリックは三時間後に無事ジャネンバによつて助けられました。

第6話（後書き）

追記 1%の力でもジャネンバでは強すぎたので1万分の1の力にしました。

第7話（前書き）

今回かなり時間を飛ばします。

ラカンとの戦いから早7ヶ月が過ぎた。

ヘラス帝国の戦況は、たつた5人の精銳部隊により覆された。

その精銳部隊の名は紅き翼。だが俺の知つてゐる紅き翼の今の人數は4人のはず、恐らく俺と同じようにこの世界にやつて来たんだと思う。

オステイア回復作戦はこの紅き翼によつて敗北した。

ここからが本当の地獄だつた。何せたつたの5人で優勢だつた戦況を反転させられるのだ。帝国としてはまさに悪夢だらう。

慌てた帝国は俺に何度も戦場へ行つて欲しいと頼んだが、そのつど主のテオドラに拒否された。

さらに慌てた帝国は、世界最強の傭兵ジャックラカンを送り込み紅き翼を抹殺しようとしたが、見事に裏切られ逆に紅き翼の仲間になつてしまつた。

これによりさうした慌てた帝国だが、幸いな事に連合は紅き翼を辺境の地に移動させられた。恐らく紅き翼がいると自分らの手柄が無くなるからだとかそう言つ理由だろ。末期だな。

これ幸いと、帝国は大規模移転による攻撃で要所、グレート＝ブリッジを占領した。

だがここは連合にとっても重要な場所で、奪還作戦が決行されるらしい。さらにその作戦に紅き翼も投入するという情報を掴んだ。

それでまた俺に戦場に行ってくれと頼んだがテオドラは首を横に振るばかり。

そういうじつに、連合によるグレート＝ブリッジ奪還作戦が始まった。

戦況は悪い。紅き翼の圧倒的な火力により要塞は崩され、大混乱に陥っている。所々で各個撃破され、もう撤退する他ない。それでその撤退を援護してほしいと泣きながら念願してきた。

「姫様！このままでは我が兵の半数以上が失われてしまいます！！どうか決断を！！」

「う～む、いやしかし…」

流石のテオドラも気持ちが揺らいでいる様だ。

「テオドラ、俺は別に行つてもいいぞ。」

「じゃが相手はあの紅き翼じゃぞ！？もしものことがあったら…」

「大丈夫だ。俺は負けない、絶対にだ。」

俺は堂々と言い放った。テオドラは目を瞑り、そつと話した。

「わかったのじゃ。じゃがジャネンバ、必ず生きて戻つて来るのじやぞ。」

「俺が死ぬとでも思つてゐるのか？逆に殺してやるよ。」

そう言つて俺は空間移動をして戦場に向かつた。

空間移動でグレート＝ブリッジに着いたが、思つたよりも酷い状況だな。

あちこちで人が倒れているし、兵士は混乱していて右往左往の大騒ぎだ。指揮官はおらんのか。

「お前ら落ち着け！――！」

でかい声で俺がそう言つとい、皆が一齊に俺を見る。

前に俺と模擬戦で戦つた奴がいた。何故近衛兵がここに居るのかは知らんが。

「俺は第三皇女・テオドラの命により撤退を援護しに来た――」の
指揮官は？

「し、指揮官は、戦死しました！」

「そりゃ！ それでは臨時に俺が指令を出す！ お前らは武器や食料を出来るだけ持ち撤退しろ！ ！ そしてこの命令を他の部隊にも伝えろ！ 俺はお前らが撤退するまで敵を食い止める！ ！」

「貴方一人ですか！ ？ 無茶です！ いくら貴方が強くても一人では！ ！」

「大丈夫だ！ 俺を信じろ！ ！ さあ何をしている！ ！ さつさと撤退しろ！ ！」

「す、すみません！ ！」

そう言つて皆は撤退の準備を始めた。

「さてと、向こうにでかい気が6個、その内の一つが転生者か。久々に楽しめそうだ。」

何時の間にかかなり好戦的になつた俺だつた。

俺の名前は藤原大輝、見ての通り転生者だ。

事故で死んで神様に会つてチート能力を貰うといつよく見かけるパターンだ。

まあ俺は昔から運が良かつたからな。

俺は今紅き翼の歯と一緒にグレート＝ブリッジ奪還作戦に参加している。

唯でさえ原作では最強の紅き翼にチート能力を持つた俺が加わっているのだ。帝国軍はすぐに総崩れだ。

「しかし、歯ごたえが無い奴らばかりだな。」

ナギがつまらなさそうに言つ。

「まあやつ言つた、俺らが強すぎるんだ。」

「へ、まあな。俺は世界最強の魔法使いだからな。」

俺はナギと軽口を言いながら戦場を歩く。

だが、突如物凄い気が現れた。

「な、なんだーー?」の馬鹿でかい気はーー?」

「どうやら誰かが転移してきた見たいですね。」

アルが気楽そうに言つが、額に汗が出ている。

「へーまさか帝国にもこんな奴がいるとはな。楽しめそうだぜー!なあラカン!」

ナギがそう言つてラカンの方を向くが、ラカンの様子がおかしい。冷汗を引くぐらにかき、全身が震えている。

「ど、どひしたんだ？」

あまりの様子にナギが声を掛ける。

「奴だ、奴が来る…」

ラカンが震える声で呟つ。

「何だよ奴つて？」

「帝国にいるジャネンバつて言つ奴だ。」

「ジャネンバ？ 聞いた事ねえな。」

ナギがそう言つが俺は頭の中が真つ白になつた。

ジャネンバ？ ドラゴンボールのあのジャネンバか？ だが何故奴がここに？ もしや俺と同じ転生者か？

「聞いた事ありますね。確か帝国の皇女を誘拐犯から救い、さらに近衛兵100人を一分で倒したとか。」

「へー俺の方がもつと早く倒せるぜー。」

ナギがそう言つが俺はよく一分も持つたなと思つた。ジャネンバなら一秒でも全滅できるだろ。

「だけどラカンはなんでそいつの事知ってるんだ？」

「…実は俺はジャネンバと戦った事があるんだ。」

「おーおー、よく生きていたな。

「だが、結果は俺の完敗。信じられるか？奴は俺の本気のパンチを受けても平然としているんだぜ？」

「そんなに強いのか！？ぐぐ！早く戦いてえぜー！」

「よせー！ジャネンバとは絶対に戦うな。奴は次元が違うすぎる。」

確かに俺たちとは次元が違う、違うすぎる。

「ラカンがそこまで言つとは珍しいな。」

詠春が珍しそうに言つ。

「ああ、それにジャネンバはまだ1万分の1の力しか出してないと言った。その力に俺は手も足も出なかつた。本当に化け物だよ、あいつは。」

「誰が化け物だつて？」

後ろからいきなり声が掛けられ、臨戦態勢を取りながら後ろを向くと、そこには想像通りのジャネンバがいた。

俺、生きて帰れるかな？

第7話（後書き）

次回、ジャネンバ無双。

俺は要塞から空間移動をして紅き翼の後ろに出了。見ると、何やら全員で話をしていた。

「ああ、それにジャネンバはまだ1万分の1の力しか出してないと言つた。その力に俺は手も足も出なかつた。本当に化け物だよ、あいつは。」

「誰が化け物だつて？」

思わず俺がそう言つと、全員が臨戦態勢を取りながら振り向いた。

「ジャ、ジャネンバ！？」

「久しぶりだなラカン。何お前裏切つてるんだよ。」

「いやあのこれはその…」

ラカンは冷や汗をダラダラとかきながら言ひ訳を言つてはいる。

「まあこい、どうせ全員倒すんだからな。」

やつて俺は氣を上げる。

「はっ！？」

ドン…と突風が吹き荒れ、石などが宙を舞つ。

「ねむねむーー！」

「な！？」

「まさか……」れ程とは……」

「うのこほせはれ」

「ええ、本当にやばいですね。」

いや、まだ。またシャネンハは1万分の1の力も出してねえ。

あれで一万分の1も出してないと

なるほど
テカンがああも怯える理由が分かりましたよ

お隣に正面の門ではなくて裏の方へかかる

俺がそいつと一緒に全員が構えた

それじゃあ出すよ。お前からだ!!

そこへ言ひて俺はガキに突き込む

「やは？」

速いと言つ暇も無く、俺の拳はナギを捕らえた。咄嗟に腕を交差させてガードをしたのは褒めてやりたい所だが、俺の攻撃の前では意味をなさない。

「すああああ！……」

「ゴン……！」と俺の拳はナギの腕に当たり、ボキ！と腕が折れる音がする。さらに衝撃で後ろに吹つ飛ばされる。

「ぐあああああ！……？」

「ナギ！……ちくしょう！……めがくすり強すぎる！……」

「そう言えばまだ俺の得意技を見せてなかつたな。」

「はあああー斬岩剣！……」

後ろから剣を持った男が斬りかかって來た。名前は忘れた。

俺はそれを分解して避ける。

「な、なに！？」

剣を持った男の動きが止まり、俺はその隙に右手に氣弾を持ってぶつける。

剣を持った男の腹の少し前から氣弾を持った俺の腕が出て来てその氣弾が腹に当たり、爆発した。

「がはああ！……？」

男は吹つ飛ばされ、動かなくなつた。

「な、何だ今のは！？」

「どうだラカン？今のが俺の得意技、空間移動さ。」

「俺がそう言って話していると、身体がほんの少し重くなつた。」

「ん？なんだ？身体が少し重くなつたぞ。」

「私の全力の重力魔法を受けても平然としているとは……」

「ふん、俺を倒したければこの100倍は持つて來い。」

そつ言つて高速移動をして俺に重力魔法を掛けた奴の腹を殴る。

「うふっ！－！」

また一人ドサッと倒れる。

「あとはお前ら三人だけだな。」

そう言つて3人を見据える。

「ラカン・大輝、どうするのじゃ？」

「どうすると言われてもなあ……」

「ああ、ジャネンバは俺ら三人が同時に掛かつて來ても傷一つつけられないだろつし……」

「ああそだ。どう頑張つてもお前らじや俺に傷一つ負わせる事は出来ん。諦めるんだな。」

そつと身体を分解して、子供の後ろに現れ頭を「ゴンゴン」と殴る。

「ぬあーーー！」

ドサッと倒れラカンと大輝といつ奴は飛び退く。

「くそあ、こりうなりや自棄だ。ラカンー同時に仕掛けバーバーー！」

「わかつたぜーーー！」

そつ言つてラカンは拳で、大輝は剣で俺に突っ込んでくる。あの剣は確かにエクスカリバーだつたかな？

「うおおおおおーーーー！」

ラカンの突き出された拳を俺は身体をずらして避ける。

「もらつたあああーーーー！」

大輝がエクスカリバーで横に斬りかかって来るが俺はジャンプしてそれを避け、尻尾でなぎ払う。

「ぐわあああーーー！」

ズザザザザッと地面を滑る様に吹っ飛んでいく。

「ラカン、お前だけは簡単に気絶をせいやうんだ。」

「へ、そいつは光榮だなつー！」

そつ言つてラカンは拳のラッショウを仕掛けてくるが俺もラッショウで対応する。

「エクス

」

後ろから何か声が聞こえる。まさか撃つ気か？

「カリバー——！？」

振り下ろされたエクスカリバーから光線が飛んできた。だが俺はラカンから飛び退き、分解してさける。

「ちょ、おま、大輝いいいい！？？」

そして放たれた光線はラカンに命中した。

「し、しまった！？」

「ばかが、どこ狙つていやがる。」

そつ言つて俺は後ろに姿を現した。

「くつ——！」

大輝は後ろに飛び退く。

「エクスカリバー。確かにいい剣だが俺には全く効かんぞ。まあドラゴンボールが異常なんだがな。」

「エクスカリバーとドリラ「コンボールを知っているって事はやっぱりお前も転生者か！！」

「まあ、俺はトラックに轢かれて氣づいたらジャネンバになつていたんだ。」

「何でよつこよつてジャネンバ何だよー」」んなの勝てるかーー。」

「まあそつ悲觀するな。今、樂にしてやる。」

「そつ言つて構えるが、要塞の中に氣がもつ無い事に気がつくべ、せりふから無事に撤退できたようだ。」

「ふむ、じつやら無事に撤退出來た様だ。俺は撤退の支援に來た訳だからもつこには用は無い。運が良かつたな。俺は帰らせてもらう。つとその前に。」

そつ言つて俺は右手を上に向かへ、でかい氣弾を作る。10メートルはあるかな。

「一分待つてやる。その間にその汚いボロクズを片付けておくんだな。さもないと橋と一緒に木端微塵にしてやる。」

俺がそつ言つて放つと、大輝は慌てて首を橋から遠ざける。

「58、59、60！時間だーー！」

そつ言つて俺は右手を振り下ろす。それと共に氣弾が下に落ち、橋に衝突した。

刹那、ドゴオオオオン！…と物凄い音がして、さらに中規模な地震が起きた。

橋の上には巨大なきのこ雲が上っている。煙が晴れると、そこには巨大なクレータしかなかった。

俺はその結果に満足しつつ、空間移動でグレート＝ブリッジを後にして。

第8話（後書き）

戦闘描写難しいとです。

第9話（前書き）

今回少し短いです。

グレート＝ブリッジから俺は空間移動をして、今俺は王宮に戻ってきた。

「ジャネンバ！！大丈夫じゃったか！！」

テオドラがそう言って駆け寄つて来る。

「ああ、大丈夫だ。奴らでんで弱かつたぞ。俺の相手になりやしねえ。」

「あ、あの紅き翼に勝つたのですか！？」

テオドラに念願してきた人が驚いてそう言つ。

「ああそうだよ。確かにこの世界では奴らは異常だが、俺の方がもつと異常だつただけや。」

「おお、なんと頼もしい。それで無事に撤退が出来たのでしょうか？」

「大丈夫だ、全員無事に撤退できたよ。それついでに橋も木端微塵にしておいた。」

「す、素晴らしいですジャネンバさん！！貴方は帝国の英雄です！」

「いや、俺は英雄なんて柄じゃ……」

大体、ジャネンバは邪念から生まれた根っからの悪だぞ？それが英雄だなんて笑えてくるぜ。

「いいえ！貴方は英雄ですよ！…姫様！…ジャネンバさんの功績を称え、式典を開いてはいかがでしょうか？」

「おお！それはいい案じゃ…さくそくお父様にお願いしていくのいや…！」

「ちよ！勝手に決めるなよ…！」

俺がそう言つが全く聞いてくれず、さうに皇帝も許可を出してしまつたので俺は泣く泣く式典に出る羽田になつた。

俺ら紅き翼は今、最悪の気分だった。

帝国最強の敵、ジャネンバにコテンパンにされた俺達に掛けられた言葉は、称賛だった。

貴方達紅き翼のお蔭でグレート＝ブリッジを無事に取り戻せました。ありがとうございました。

だがそんな言葉は逆に俺達を沈めていく。

「……ちくしょつ。」

ナギがそう呟く。それもそうだろう。ナギは自分が世界最強の魔法使いだと、常日頃言っていたのに真っ先に倒れたのだ。その無様な姿に自分で自分を責め立てているだろう。

「まあそういう悲観するなナギ。むしろその程度で済んで良かったじゃねえか。」

ラカンがそう言つて励ます。てかよく生きているなラカン。

「良くねえ……俺は何て無様なんだ……真っ先にやられちまうなんてつ……！」

「どうみち全員やられていたさ。それが早かつただけの話だ。」

「でも納得がいかねえんだよ……」

そう叫んでナギは折れていかない左手の拳を血が出るべりべり強く握り締める。

「しかし彼の強さは聞いていましたがまさがあれ程とは……」

「ああ、それに何だあいつの身体は……俺の斬石剣を分解して避けたぞ……！」

「あれは俺も驚いたぞ。ジャネンバと戦った時もあんなの見なかつたからな。」

「わしもあれにせりひれてしまつたからなの。全くぬづけなかつたの
じや。」

「分解? 何だそれは?」

見る前にぶつ飛ばされたナギが聞いてくる。

「あいつは身体を文字通り分解できるんだ。そして瞬時に別の場所
に移動できるんだ。」

「な、何だよその能力は! そんな能力聞いたことねえよ! ! !

「俺も聞いたことねえよ。それにジャネンバは空間移動と言つてい
た。恐らくジャネンバは空間を移動しているんだろう。」

「それなら移動中はこちらの攻撃は一切効かないと言つ事ですか。
まさかナギとラカンと大輝を超えるバグキャラが居たとは……」

そう言つてアルが溜息を着く。むしろバグじやなくてチートだ。俺もチートだけだ。

「しかしジャネンバと言つたかの? そいつをどうにかせねばわしり
は負けてしまつだ。」

「どうにかせねばつてどうすればいいんだよ。」

「う~む……」

俺がそつぬづけでバグキャラが唸る。

「大体、ジャネンバには小細工なんて通用しないだろ。感じただろあいつの力を。それにもう1万分の1の力も出してないらしいじゃないか。そんな相手に勝てるわけないだろ。」

悪いが俺は自殺志願者じゃないんでね。確かに俺は真祖の吸血鬼になつて最強になつてはいるがそれはネギまの世界での話。相手がドラゴンボール、しかもジャネンバだなんて無理だ。細胞一つ残らず消滅しては再生のしようがない。

「だから俺は戦うなといったんだ。次元が違いすぎる。」

ラカンがそう言つと、再び俺達は再び沈黙した。

グレート＝ブリッジで紅き翼と戦つてから幾日が過ぎた。

帝国の起死回生の攻撃は失敗に終わったが、帝国の士気は減る所か増すばかりだ。

何故なら俺ことジャネンバの活躍のおかげだ。

あの悪魔の様な紅き翼をまるで虫を散らすかの様に叩きのめしたからな。

この話は帝国中に瞬く間に広がり、俺は帝国の英雄になってしまった。

しかも連合には帝国の大魔王なんて中一病みみたいな称号がつけられてしまった。恥ずい。

まあ確かに紅き翼を蹴散らして橋を木端微塵にしたけれどさ、どうせならもうちょっとマシな名前にしてくれよ。何だよ大魔王って、ピッコロかよ。

しかも何が起きたかは忘れたが紅き翼が何かやらかして連合から追われているらしい。今現在消息は不明になっている。

おかげで上の連中は大喜びだ。まあ紅き翼が居なければこの戦争、勝つたも同然だからな。

「ジャネンバ。 おるかの？」

そつとテオドラが俺の部屋に入ってきた。

「何だの用だ？ 街なら昨日行ったばかりだろ？」

「違うのじゃー。妾はこれから会談をしていくのじゃ。」

「会談？ 一体何の話をするんだ？」

「実はこの戦争を終わらせるためにオステイアのアリカ姫が妾と会いたいそなうのじゃ。」

「ほつ、だがそう簡単に終わらせられるのか？」

「難しいじやうつが最もこの戦争を早く終わらせたいのじゃ。だから最善をつくすのじや。せじ。」

「良い心掛けだ。それで俺に何の用だ？」

「その会談の護衛を頼みたいのじゃ。事情で大人数では行けないから。」

「まあ護衛が俺の仕事だからな。それで何処に行けばいいんだ？」

「今回は妾のプライベート船で行くから別に飛ばなくともいいのじや。非公式の会談じやから見つかると厄介じやからぬ。」

「なるほど。」

まあ俺は魔法なんて一切使えないからな。認識阻害何て魔法もある

し、中々魔法も侮れん。

「それで何時出発するんだ？」

「もう準備は出来ておるのじや。今からすばぐ出発するのじや。せじの出発するのじや。」

「そこですか。」

あの後、飛行船に乗つた俺達は会談が行われる場所に向けて出発した。

それにしても流石皇族。プライベート船はかなり豪華で武装もしている。

暫くダーリーとしていると、城らしき建物が見え始めた。

「ジャネンバよ、そろそろ降りる支度をするのじや。」

「はいはい、ひとつ言つても俺持ち物なんて持つてないがな。」

「まあ非公式の会談じゃしの。」

「オドリとそり話してると、飛行船が着陸した。

「それではジャネンバ。しっかりと護衛をするんじゃぞ？」

「まかせろ。テオドーラには指一本触れさせん。」

「それは頼もしいの。」

俺とテオドーラは城の中に入つていった。

「ふむ、中々の広さじゃの。」

俺とテオドーラは今、用意された部屋の中に居る。

流石に王族同士が話し合つだけにかなり豪華だ。

テオドーラからしたらこれでも中々のレベルらしいが、贅沢だねえ。

しかしこの城の中にはかなりの数の気が感じられるな。俺達を捕まえる気だな。

そう思つてみると、どうやら来たようだ。

あれがアリカ姫か。本当に俺内容を忘れているな。どんな姿だったのか全然思い出せなかつた。

アリカ姫は俺の方を見て、驚愕した顔をしている。

「なつー？お前は帝国の大魔王ーーなぜ！」

「ジャネンバは妾の護衛じや。安心せい。」

「帝国の大魔王自ら護衛とは…」

アリカ姫が何か呆れている。

「まあそれは置いといて、本題に入るのじや。」

テオドラがそつまつと、アリカ姫もキリッとする。

「私はアリカ・アナルキア・エンテオフュシア。話の場に来てくれて感謝している。」

「妾はテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミアじや。妾もこの戦争を早く終わらせたいのじや。気にするでない。」

そんな感じで話が始まつたが俺は護衛なのでボーッとしている。暫くすると城の中に居た気が動き始めた。そろそろお密さんがくる時間が。

「ちょっとストップ。お密さんが来た様だ。」

「お密？もしや嗅ぎつかれたのか？」

「その様だ。」

そう言つて俺は気が集まつている右の壁に手を向ける。

「はっ！！」

「ヒコンー！」と俺の手から氣弾が飛び、「カーンー！」と氣が集まつてくる右の壁に命中する。

「な、何だああ！？」

「ちくしょう！痛え！痛えよ！ー」

最初の一撃でかなり混乱した様だ。

なんじや!? 何が起こつたんじや!?

「襲撃だよ。情報がダダ漏れじやねえか。」

「すまんな。まさかこんな事になるとほ。

一気にするな。そんな事より早く逃げるぞ。

そう言つて俺は左の壁に気功波を放ち、外に出る通路を開く。わざわざ罠が張られている通路を行く必要も無い。

「無茶苦茶じや…」

アリカ姫が何か言つてゐるが知らん。

「アーネスト君、おまえが何を言つてたんだ？」

そう言つて俺は一人を抱きかかえる。

「ちよーじゃねンバ！…何をするのじやー…」

「お、お主なこきつー…」

「時間が無いんだしようがないだろ。後舌齶むなよ。」

そつ言つて俺は通路を一気に飛んで外に出る。

飛行船を田指すが、既に壊されていた。

「ちつ、ぶつ壊されてやがる。」

「ああ、妾の船が……」

「まあ取りあえず」」から離れよ。」とその前に

そつ言つて俺は城から少し離れた所で一人を降ろす。近くに気は感じられないから大丈夫だろ。」

「お主、何をする気なんじや？」

アリカ姫が聞いてくる。

「なに、ちよつと害虫を駆除するだけさ。」

そつ言つて空を飛び、両手を後ろに構える。ベジータ、技を借りる
ぜ。

「ギャリック砲――――――！」

「ヒュウ！――と放たれたギャリック砲は城に命中すると、大爆発を起した。

ズドーン！――と物凄い音がし、さらに地面が揺れる。そして突風が吹く。俺は高速移動で一人の前に出て、一人を支える。

「のわわわわ――!?」

「ぬぐうつ――！」

やがて突風が収まつたので、一人が城の方を見ると、絶句した表情になる。

なぜなら城があつた場所には巨大なクレーターがあるからだ。城は文字通り消滅した。

「な、なんと――」

ようやく搾り出した様な声でアリカ姫がそう呟く。

「す、凄いのじゃジャネンバ――！」

逆にテオドラははしゃぎ回つている。

「…紅き翼が負ける訳じゃ……」

「あたりまえじゃ――ジャネンバは紅き翼なんかには負けないのじゃ――！」

小さく呟くアリカ姫にテオドラがまるで自分の事の様に言い放つ。

「それよりアリカ姫。帰るあてはあるのか？」

「……無い。と云つより私はもうオステイアには帰れない。」

「何でじゃ？」

「オステイアはもう大部分が完全なる世界に握られてゐる。恐らくこの襲撃もそこから漏れたのだろう。」

「完全なる世界？聞いた事ないの？」

完全なる世界、聞き覚えがあるな。

「こいつ等が裏で戦争を操つておつたのじゃ。奴等にとつて今戦争が終わると不都合な事が多いうらしい。だからここを襲撃したんじゃろつ。」

「ふん、完全なる世界？そんなの呑みのめしてやるよ。」

「…お主なら出来やうじゃな。」

「ジャネンバで良いぞ。」

「そつか。なら私もアリカで構わん。」

「それでアリカ、どうするんだ？俺達も何時までもお前の面倒を見ている暇も無いぞ。」

「う～む、協力体制にある紅き翼に接触出来ればいいんじやが…」

「それなら送りてやつてもいいが。」

「は～し、しかし居場所が…」

「俺はどんなに遠くに相手がいても氣で探知できえるんだ。居場所は分かるよ。」

「……もう驚くのも疲れたわ…」

そういつて溜息を吐くアリカ。おひおひこけませんな、幸せが逃げるだ。

「まあとつあえず紅き翼の所に行くか、テオドラ、乗れ。」

俺は身体を横にして飛ぶ、テオドラがソリューションヒジヤンプして乗る。

「私は一体何処に乗れば…」

「俺がお前を掴む。」

「え、えええー…」

「しょうがないだろ。こんな状況なんだから。」

「うう、しょうがな…」れも世界のためじや…」

アリカがそう言つので俺はアリカの服を掴む。

「それじゃ、行くぞ。」

そう言つて俺は紅き翼の所に飛んで向かつた。

第10話（後書き）

だんだんクオリティが低くなつて來てる…

あの後、丸一日掛かってようやく紅き翼がいる所に着いた。

テオドラだけならもつと速く行けただろ？が今はアリカもいるし、速度が出せなかつた。

おまけに姫様達が我が仮で頻繁に地上に降りていたので余計に時間が掛かつたのだ。

まあ無事に着いたから良しとしよう。

「アリが紅き翼の秘密基地か…なんじゃただの掘立小屋ではないか。流石王族、俺の目からしたら結構大きいのに掘立小屋扱いしやがつた。

「まあそつ言つな、とつあえず紅き翼と話をしよう。」

そつ言つて俺はドアの前に立つ。

「ちわ～佐川急便で～す。アリカ姫をお届けに参りました～」

そう言いながらコンコンとドアをノックする。すると後ろにいる一人はズルつとずつこけ、家の中ではドンガラガツシャンツと物が倒れる音がする。カオスだ。

バン～と勢い良くドアが開かれる、どうやら紅き翼全員このよう

だ。

「てめえはジャネンバ！－何でてめえがここに居やがる－－。」

ナギが叫ぶよつて言ひ。正直かなり煩い。

「アリカを届けに来たんだよ。さつを言つただ。」

そつ言つて俺は後ろを指差す。ナギは姫さん－？と驚いている。ちゃんと話は聞けや。

「それじゃアリカ、もつ俺達に用は無いから帰らせてやるが。」

「待つのじやーー！」お主達と話がしたい。帰るのはもう少し後にして欲しい。」

「だとや、エリクスのオドリフ。」

「ふむ、まあよから。」

「すまんな。恩に着る。」

そう言つてアリカは紅き翼の方を向き、今現在の状況を説明せよと言つた。

「連合にも帝国にも…アンタのオステイアにも味方はいねえ。」

「それどこのかオステイアの上層部が最も黒いと、その可能性さえも上がっています。」

「やはつやつか。」

絶望的な状況にも関わらず、アリカは不敵な笑みを浮かべていた。

「連合に帝国、そして我がオステイア。世界全てが我らの敵というわけじやな。」

そう言つてゐるアリカの顔は覚悟を決めているかの様に晴々としていた。

「じゃが…お主とお主の紅き翼は無敵なのじゃ やつへそれに帝国の大魔王もおゐしの。」

え？俺も入つてゐるの？そう言おつとしたが日本人特有の空氣を読むスキルで黙つていた。

「世界全てが敵、良いではないか。こちらの兵はたつたの9人、じやが最強の9人じや。」

あ、やつぱり俺入つていやがる。この為に呼び止めたのかよ。

「ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギと、我が盾と我が剣となれ。」

そう言つてアリカは手に持つてゐる黄金の剣を構えた。それを見たナギは不敵に笑つてゐる。

「へ、やれやれ、相変わらずおつかねえ姫さんだぜ。いいぜ、俺の杖と翼、あんたに預けよつ。」

「つして小さな反撃、されど大きな反撃が始まった。

「テオドロ、何か俺達も戦う羽目になつてるんだが。」

「まあ良いではないか。腐つた重鎮共を掃除できる絶好の機会じゃ。」

「

「でもさすがに帰らないと不味いんじゃ……」

「大丈夫じゃ。お父様が何とかしてくれるのじや。」

皇帝……胃薬でも送つてあげようかな……

あの後、皇帝の胃の調子を案じながら、俺達はこれから事を話した。

結構かつこいい事言つていたが相手がどこにいるのか分からなければ攻撃のしようがない。それで頭脳班と肉体班に分かれて行動している。因みに俺は肉体班だ。敵を見つけて叩きのめす。俺に情報収集などに合わん。それにこの身体じやすぐに見つかってしまうからな。

俺達が行つてゐる活動は地味だが、それなりに効果があるようで仲間も徐々にだが増えてきた。

時々ナギが俺に喧嘩を売つてくるが適当にボコボコにしてその辺に捨てておく。

だが流石は英雄、どんどんと実力を上げていやがる。今では本気ではないにしろ冷つとされる攻撃も出始めた。まあ1万分の1の力を出したら瞬殺できるが。

因みにラカンは力の差が分かつてゐるらしく、喧嘩は売つてこない。まあ模擬戦はしているが。

また何時もの用に喧嘩を売つて來たナギをボコボコにすると、タカミチが話しかけてきた。

「ジャネンバさんー僕に稽古をつけてくださいー！」

「え？ 何で俺が、ガトウがいるじゃねえか。」

「確かにそうですけど…それでも魔法を使わずにナギさんを圧倒するジャネンバさんには非稽古をつけてもらいたいんですー！」

そう言つて日本人もびっくりな土下座をしてきた。何か周りから冷たい視線が…

「お願いしますー！ 僕に稽古をつー！」

「…わかった。わかったから顔を上げてくれ。周りの視線が…」

もしやタカミチは「これを狙つたのでは？ 恐ろしい奴だ。

まあそういうことで俺はタカミチに修行をつけていた。決して稽古ではない。

まあ気を感じられる事は出来る様なのでとりあえず肉体強化をやらせた。50キロの重り着けさせながら。最初の方はこいつ死んでんじゃね？っていうくらいバテていた。おおタカミチよ、死んでしまうとは情けない。

まあ最近はすぐにはバテない様になつたが、そろそろ重量を増やすか。そしてそろそろお待ちかねの気の修行も並行して行う。俺としてはギヤリック砲を覚えさせたいが難しいのでかめはめ波を教えさせることにした。と言つてもまだ先のことだが。

まあこんな感じで早数ヶ月、ついに最終決戦が始まろうとしていた。

あれからこりこりあつたがいよいよ最終決戦の時が来た。

俺は今、テオドラの乗つている戦艦に乗つている。

「しかしかなりの数だな。かなりの金がかかりそうだ。」

「負ければこの世界は終わりなのじや。こまわりそんな事言つてい
る暇はないのじや。」

「それもそつか。」

俺はテオドラには危ないからと、帝国の宮殿に置いていこつとした
のだが、テオドラは世界の危機にじつとなんかしてられないのじや
！－つと言い大艦隊を率いて決戦の地、墓守り人の宮殿に今現在向
かっている。あいかわらず行動力ありすぎるのである。

「さて、俺は先に行つて来るぞ。紅き翼の皆さんは既に攻撃を始め
ているようだ。」

「うむ、そつか。気をつけて行つて来るのじやぞ。」

「わかつたよ。」

そつと云つて俺は氣をたどり紅き翼の所まで空間移動をした。

俺が空間移動で紅き翼の前に出ると、白髪の少年がナギに首を掴まっていた。

「あれ？もう終わっちゃったのか？」

「ん？ ああ ジャネンバか。 どうやらその様だ。」

ラカンが俺の存在に気づき、振り返りながらそう言う。

「ちつ。俺の出番が無いじゃないか。来て損した。」

そう言つたが何か引っかかるんだよな……思いだせん。

が君にはたゞ僕がすべての黒幕だと思ってるのかい？」

卷之三

向むかれた方を見ると、でかし光線が「こ」せに向かってきた。

俺は高速移動でその光線の前に出て、両手で光線を抑える。

この世界に来てから一番強い攻撃だ。ネギまでは驚異的な戦闘力だ。

だが、本気を出してないにしろ、戦闘力1500億のジャネンバには敵ではなかつた。

「うぐぐぐ……でやあああ……！」

俺は光線を上に弾き飛ばした。光線は天井をぶち抜き、床に溶えていった。

「はあはあ、へ、どうやらまだ骨のある奴がいるようだな。」「

見ると、黒いローブを纏つた男が出てきた。ほつ、こりつや紅き翼では勝てんな。戦闘力が違いすぎる。

「驚いた。まさか私の魔法を弾き飛ばす奴がいるとはな。」「

「あの程度の威力じゃあ、俺を倒すことなどできないな。」「

「おもしろい。奥で待っている、死にたければ来るんだな。」「

そう言つて黒いローブを着た男は奥に戻つていった。

後ろを振り向くと、何故か皆ボカーンとしていた。

「何馬鹿面していやがるんだ。」

「いや、いやあの攻撃を簡単に弾き飛ばしたんなら畠然とするのも無理ないだろ。」

大輝が何か言つているがお前ジャネンバの強さ知つているだろ。ネギまどドラゴンボールでは戦闘力の差がありすぎる。しかも俺が憑依したのはあのジャネンバだぞ？あの野郎でも俺には勝てん。

「まあそんな事より、お前はまだやれどここから出ぬ。」

「ジャネンバはどうするんだ？」

「決まつてるだろ。あいつを血祭りに上げてやる。」

そつと氣を上げる。俺の周りから突風が吹き荒れ、建物がギシギシと音を立てる。

「ま、までー？」こんな所でそんな力を出すなーー墓守り人の宮殿が壊れるぞーー！」

ラカンが叫ぶよつとねつ言ひ。

「心配するな。ソレではそんなに力は出せん。」

そつと俺は宮殿の奥に飛んで行つた。

「よし、いくか！！」

「ほつ、よく逃げずに来たな。」

「それはまた面白い冗談だ。逃げるのはお前の方じや無いのか？」

俺は黒いローブを着た男と対峙している。威圧感が結構あるな。

「私は造物主。始まりの魔法使いとも呼ばれている。」

「俺はジャネンバ。とある世界から来た邪念の戦士だ。」

そう詰つて俺は身体を分解する。

なに？

造物主が驚いてしまふか。俺は構わぬ後ろに出て蹴り上げる。

造物主がドーン！！と音を立てて天井を突き破る。俺もその後に続く。

「どうした？ そんな程度か。もうと本気でやつて欲しいな。」

そう言って俺は1000分の1の力を解放させる。俺の身体に紫の
氣の炎が包み込み、大気がビリビリと振動している。

造物主はそう叫んで魔方陣を展開し、複数の黒い魔弾を放ってきたが、遅い遅い。

俺は魔弾の嵐を避けながら近づき、造物主の顔面目掛けて殴りつけ

「おはようございます！」

ドゴンーーーと俺の右ストレートが顔面に入り、造物主が後ろに吹

き飛ぶ。俺はすかさずピチコンと高速移動をして造物主の後ろに現れ、その背中を殴りつける。

「ぐはあ……？」

急降下して落ちていく造物主にまた高速移動をして落ちて来る造物主の腹目掛けて殴りつける。

「がはああーー??」

造物主の身体がぐの字に曲がり、ビチャビチャと血が口から噴き出される。

「それとも、本気でやつてこのザマだったのか？それは悪い事を言った。謝るよ。」

「がふっー・ぐふ…」

どうやらもう話す力も無いようだ。もつそろそろ飽きたから終わりにするか。

俺は造物主を持つて高度を上げる。大体1万メートルぐらいまで来てたどろうか。俺は造物主を上に投げつける。このままでは造物主は宇宙をさまよいながら死ぬことになるが俺はそこまで鬼じゃない。

一瞬でこの世から消し去つてやる。

俺は両手を左右に広げ両手に氣を溜める。ある程度溜まつたら両手を前に突き出し、結合させる。そのあまりの氣の強さで、雲は一斉に離れ、氣からは雷が鳴っている。

「くらえ！ ファイナルフラッシュ！ ！ ！」

俺の両手から勢い良く放たれたファイナルフラッシュは、既に豆粒の様にならほど遠くに飛んでいった造物主を簡単に飲み込み、数百万年離れた場所で爆発した。

ふつ、終わった。そう思つて周りを見ると、雲が一つも無かつた。どうやら周囲にある雲全部吹き飛ばしてしまつたらしい。やはりファンナルフラッシュはやりすぎたか。

まあ終わつたからいいかと俺は地上に降つると、またもや皆ポカーンとしていた。

「何だ？さつきよりも馬鹿面になつてゐるぞ？」

「……何だ今の技は……」

ラカンが搾り出した声でそう言った。やはりネギまの世界でファイナルフラッシュはやりすぎたな。

「ファイナルフラッシュ」と語ってな、当たれば魔法世界は粉々に消し飛ぶぞ。」

「…何かもう驚くのも疲れてきたぜ。」

ナギが呆れたよつこいつ、ナギに言わると腹立つな。

「やつはお前より」かり出でと言つたのに何故まだ残つているんだ?」

「はー? そつだ! 姫子ちゃんを助けなければー!」

ナギがそつ言つて探しに行こうとしたが、突如地面が揺れた。

「なー? もう儀式が始まつてしまつたのですか! ?」

いつも冷静なアルが叫ぶよつとそつ言つ。確か魔法が使えなくなるんだつたかな? 俺には関係ない話だ。まああれを消せば良いんだな。

「ほーう、じゃああれを跡形も無く消せば無事解決つて訳だな。」

「なー? ばか! やめろ! あの中には姫子ちゃんがいるんだぞ! !」

「その人間一人に全世界を滅ぼす氣か! !」

俺はそう言つてギャリック砲の構えを取るが、何やら大艦隊がやって来た。そういう居たな。

この後、木端微塵にされる事無く、封印された。

あれ? そういうば、ゼクトが居ないな。何処にいつたんだ?

最後が適当になってしまった。

墓守り人の宮殿で最終決戦をして見事勝った俺達は、戦争終結を告げる記念式典に出ていた。

まあ紅き翼で居るのはナギとラカンと詠春だけなんだけどね。他の奴らは何処にいつたんだよ。羨ましいなこんちくしょう。式典なんか大嫌いだ。

俺と紅き翼は大衆に囲まれながら帝国と連合の魔法使いと鬼神兵達に警護されつつ記念式典の会場に向っている。てか護衛なんぞいらんだろ。誰がこんな恐ろしい面子を襲うんだよ。

それになんか鬼神兵達が俺に怯えているんだが、もつ慣れた反応だけや。さすがに傷つくよ。

会場に着いたらそれぞれメダルが授^レられる。別にこんなのがいらんけどな。

「しかし、凄い数の群衆だな。」

「当然じゃ！ 何せジャネンバ達は魔法世界の英雄なのじゃからな！」

帝国所か世界の英雄になっちまつたよ。何度も言つが俺は英雄なんてガラじやねえのにな。

「…まあ、なつちまつたもんはしじょうがねえか。」

「わらじゅ。敵と出会つたのが運のつせじゅ。」

「随分と刺激的な出会いだつたがな。」のじゅじゅ馬姫が。

「むへー。つねねこのじゅ。」

頬を膨らませて怒るテオドラに俺は苦笑いを浮かべる。まあ、いつもいつもも悪くねえな。

「うして記念式典は熱狂と共に幕を閉じた。

因みに余談だが帝国は連合に領土の割譲と第一次大戦のドイツ並の賠償金を要求した。

もちろん連合は拒否したが皇帝がなら滅ぼすまでだと黙々と切ったので連合は泣く泣くこれを承諾した。

まあ俺が居るからね。連合は承諾するしかないだろ?。それある。

「はあ、まつたぐ。今日は疲れたぜ。」

あの後かなりの数のマスコミから取材が殺到して精神的にまいった俺は今日泊まる予定のホテルに避難していた。

「あれだけの事をしたのにこれしきの事で疲れるとは情けないの！」

L

「肉体的ないいが精神的なのはきついんだよ。てかよくテオドラは平然としているな。」

『 』

「せひ、いつや ホドリは絶対早く老けるな。」

「な、なんじやと――!?

何か叫び声を上げながら膝を突いて○×の格好をするテオドラ。

まあ元オーナーはヘーネス族だからまだ遠い未来だら二ヶどな

「うへ、早く老けるのは決定事項なんじゃな。」

虚ろな目をしながら立ち上がるテオドア。

「俺はさすがに寝るぞ、今日は疲れた。」

まあ俺は無視して寝る。今日はかなり疲れてんだよ。

「失礼します！…姫様！ジャネンバ様！緊急事態です…！」

あの後俺達は寝て今は朝になつたが気持ち良く寝ていた所に、突如勢い良く扉が開かれ、伝令の兵士が肩を上下に揺らしながら入ってきた。

「なんじゃ…一体何事じゃ…？」

テオドラがベットから飛び降りて事情を聞く。

「先ほど、オステイアが崩壊したとの情報が入りました…！」

「な、なんじゃと…！？何が起こったのじゃ…？」

テオドラが目を見開いて言つ。

「今現在調査中で詳細は不明です。」

それに対し予想していたのか伝令は冷静に話した。

「ふむ、紅き翼に聞いたほうが良さそうだな。」

あいつらは國家よりもいい情報を持つてゐるからな。てか団体で國家を上回るつて凄いなおい。

「テオドラ、ちょっと紅き翼の所に行つて来る。」

「わかつたのじゃ。早く帰つて来るのじゃぞ。」

「お前は俺の母親か。」

軽口を言いながら俺は気を探る。ちょうど紅き翼が集まっている所があつたので俺はそこに空間移動をした。

空間移動で俺は紅き翼の後ろに出た。

「おい、オステイアが崩壊したと聞いたが何があつたんだ？」

俺がそう言つと、俺の存在に気づいたのか俺の方を見る。

「ああ、ジャネンバか。」

ナギが答えるが何時もの元気が無かつた。これはただ事じやねえな。

「実は儀式の封印は完全ではなかつたのですよ。代償として王都を中心には以後魔法が使えない不毛の大地と化したんです。それでオステイアに浮かんでいる大小の島々が全て落ちてしまつたんです。」

「なんじゃそりや、アリカは自分の国を犠牲にして世界を救つたのか。」

「ええそうです。おかげでアリカ姫は戦争犯罪人として捕まつてしまつましたよ。」

「ふん、つまり生贊といつ訳か。」

本当に連合は末期だな。自分達の失態を他の者に擦り付けるとは日本的政治家といい勝負だ。

「それで、お前らはこれからどうするんだ?」このまま腐つていろのか。」

俺がそつと、ナギが勢い良く立ち上がった。

「そんなわけねえだら!俺だって今すぐにでも姫さんを助けに行きてえ!でも、それじゃあダメなんだ。姫さんはそんな事望んじやいねえ。」

そつ言つていつも強気だったナギとは別人のようになるナギ。

「ふん、そつちにはそつちの理由があるのか。俺は帝国側だから関係ないが、まあ数ヶ月共に過ごした仲だ。下手に動けないが少しは手伝つてやつてもいい。」

そつ言つて俺は空間移動でテオドーラの元に向つた。

「メガロメセンブリアの馬鹿共が、そこまで腐っていたとは。」

あの後俺達はヘラスに帰つてきて今、俺は皇帝にオステイア崩壊の真実を話していた。

皇帝は怒り心頭のようだ。誇りが高い皇帝にとって、この事は許せないのだろう。

「しかし我々は帝国だからな。下手に動くと不味い。」

「やうだらうな。戦時中なら良かつたが今は和平に向けて交渉中だ、国民も戦争が終わると喜んでいるから国際問題を犯すのも不味い。」

アリカの問題は完全に連合が責任を持つていてからな。下手に干渉出来ない。

「…まあ、我々に出来る」とは少ないが、やらなによつはマシだろう。」

「すまんな。無理を言って。」

「何、お前は我ら帝国の英雄だ。その英雄の頼みなら少しがらいの無茶はしよう。それにこの事に関しては俺もかなりきているんだ。」

やうやく笑顔を向ける皇帝。

「やうだな。俺らに出来る事は少ないが、それでも奴らに一杯食ら

わしてやれば。」

「ひして帝国は裏秘密だが紅き翼と協力体制をひいた。

そして2年後、遂にアリカの処刑の日がやって來た。流石にこれは止められなかつた。今頃メガロメセンブリアの汚職議員達は醜い笑顔をしているだらう。ここからが本当の地獄だとも知らずに。

俺は今、アリカが処刑されるのに使われるケルベラス渓谷に潜んでいる。俺は帝国側だから表立つての行動は出来ない。だがここなら誰も来ないから好きにやれる。

ケルベラス渓谷は魔法が使えないと聞くが、気しか使わない俺には関係ない。仮に気も使えないとしてもこの程度の魔獸には負けはない。

そんな事を思つていると、ナギが來た。

「随分と遅い到着だな、騎士さんよ。」

「つむせえ、ジャネンバの方が異常なんだよ。」

「ぐ、まあな。道は俺が作るからお前は一気に駆け抜けろよ。」

そう言つてみると、上が騒がしくなつた。どうやら始まつたよ

うだ。

「 もういいだな。ちゃんと受け止めよ。騎士たよ。」

「 へー言わぬくてモー。」

上からアリカが落ちてきた。魔獣が顔を上に向けて食おうとするが、俺はあらかじめ召喚しておいたティメンションソードを魔獣に向けて一振りする。飛んでいた氣の刃がアリカを食おうと首を上に上げた魔獣の首を切り落とす。

そうしている間にナギがアリカを受け止めた。アリカはかなり驚いている。

「 な、ナギ！ 何故お主がここにー？」

「 バーカあんたを助けに来たんだよアリカ。」

「 へー、この愚か者め！ いくらお主でも自殺行為じや。」

「 へ、誰が俺だけと叫んだだ。」

「 俺を忘れてもういちや困るな。」

「 じゃ、ジャネンバーーーお主までーーー。」

「 俺は表立つて行動出来ないからな。ナギ、さつそとここから撤退しぃ。」

そう言って俺はティメンションソードを横に振る。すると魔獣が真

つ一つになり退路が出来た。

「すまねえジャネンバ！－恩にきるぜー－！」

そつ言つてナギはアリカを抱えて走り去つていつた。

「お前達、あいつ等を追いかけて行つても良いぞ。こゝを抜けたらの話だがな。」

そう言つて俺は氣を高める。すると魔獸が怯えてしまった。

「ふん、つまらん。殺されたくなればそつと俺の前から消える。」

そつ言つと魔獸達はスゴスゴと奥に消えていった。

「ふう、終わった。今頃上では奴ら大暴れだろつな。流石の元老院達も帝国がついているとは思わないだろ。」

そう言つて加勢してやううと空間移動をしたが、何やう何時もと様子がおかしかつた。

何か次元に穴が開いている。穴は真っ黒で俺はだんだんとそこにはいこまうになる。

これはやばいと俺は一度出よつするが何故か出れなかつた。

そつしてこゝの間にもどりと穴に吸い込まれそつになる。これはやばい－－

抵抗虚しく、俺は次元の穴に吸い込まれてしまった。

第14話（後書き）

と言ひ訳で、大戦編終了です。

この後どうしようかな。このままネギまを続けるか。
それとも別の作品に行くか。

それとも気分を変えて僕は戦闘民族サイヤ人 リリカルなのは編を
書くか。

作者的には3番目を書きたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3576w/>

ジャネンバ戦記

2011年9月13日17時06分発行